仏教文化の変遷と民族そして平和

則　武　海　源

問題の所在

仏教はインドに興起し、アジア諸地域に伝播した。仏教本来の理想は「乱されることのない平安を得て、絶対の安らぎを確保する」というものである。仏教内部では仏教理解をめぐって多様な論述、教説を生んだが、相互での異端視や暴力的排他というものは政治的なごく少数の事例を除けば皆無であり現在まで共存している。他宗教との闘争も稀で、かえって諸宗教との混淆や共存にはいたって寛容である。インドからシルクロードの諸地域、チベット、中国と広範に伝播した仏教は、このような仏教の持つ寛容融和の性格により各地域の民族や宗教、文化と融合し、独特の仏教文化を築き上げている。本論は諸民族の仏教受容を仏教文化の視点から考察し、現存する壁画や仏像などから各民族に込められた平和への祈り、生活の安泰という人間本来の願いと仏教の役割について大乗仏教圏を中心に小考するものである。

釈尊と仏教の受容

釈尊の行動範囲はインドでも西北インドに限定される。いわゆるルンビニーで降誕し、ブッダガヤでの成道、サルナートで初転法輪を行い、クシナガラで入滅涅槃したというのが釈尊の行動範囲であり、そこから仏教が興起したのである。釈尊の没年時にも諸説があり、前四八六年説、前四八三年説、前三八三年説などである。

インドは、アーリア人の東進にともない、『リグ・ヴェーダ』などの聖典を中心としたバラモン教社会であり、太陽神や自然発生的な種々の神々を崇めていた。釈尊の在世時の頃になるとアーリア系と土着部族の人々が混じり合った中で、各々が部族国家を形成しており、その一小国が釈迦族の国である。このような社会情勢にあってインドの宗教自体もそれぞれ融合や普遍化がおこり、それがまた流通・交易を媒介にして諸文化、諸宗教との融合を繰り返し、社会における共生の論理や方法論を確立していった。釈尊は族長の王子として高潔な血統を継承する反面、弱小国家としての苦悩を有し、四姓制度社会の中での「貴賤の差別のない」人の共生社会を作るという思想革命を提唱した点が、仏教のもつ他宗教との混淆や共存を寛容にした特徴を生んだものとも考えられるところである。

仏教における信仰形態の形成

インドで生まれた仏教は、シルクロードなどのいわゆる通商路に沿って伝播していくのであるが、インド国内では釈尊がクシナガラで八〇歳で入滅したのち、八国の王により仏舎利は分配され、それぞれ八つのストゥーパが建立されたといわれる。この時点で仏塔が仏教の信仰・崇拝の対象となっていった。

アレキサンダー大王がガンダーラからパンジャーブ地方を制圧し、前三二三年にバビロンで亡くなると、チャンドラグプタはマダカ国のナンダ王朝を倒しパータリプトラにマウリヤ王朝を建てた。その孫にあたるアショーカ王は、カリンガに侵攻した際、バラモンや仏教の僧をはじめ一般子女にいたるまでのあらゆる者への殺戮を行い、この悲劇がアショーカ王の心に大きな傷となって残ったという。それゆえ仏教の「ダルマ（法）」による慈悲の教えに出会ったアショーカ王は、大いに感銘を受け、その後のアショーカ王治世の政治理念となった「ダルマ（法）」による統治として発展していったのである。

このアショーカ王は、八仏塔のうちの七塔をあけ、八万四千の仏塔を各地に造立して仏舎利をさらに分骨したと言われ、このことがいっそう仏塔（ストゥーパ）信仰＝仏教崇拝という形態に帰する形となったものと考えられるところである。

サーンチーの仏塔に見られるように初期の仏塔自体は、円形いわゆるお椀を伏せた形状であるが、欄楯とよばれる玉垣で周りを囲い、傘蓋（さんがい）を建て、より神聖さを強調したものへと次第に発展している。（図1参照）

仏塔自体はさほどの装飾・荘厳はないが、その周りの欄楯にはレリーフが美しく配されている。アショーカ王は最初期の仏塔の位置にさらに大型の仏塔を築き、煉瓦で覆ったとされ、南インドでも大型ストゥーパがアマラヴァティーなどにある。これらの仏塔の頂上部には傘蓋があり、最初は木製の傘蓋であったが、その後石製となり、この傘蓋が釈尊に対する尊崇の対象ともなり、広く仏塔信仰の特徴として日本にいたるまでのアジア各地でその影響を見ることができる。またこの頃、釈尊の表現法としては法輪や聖樹が用いられ（図2、図3）、釈尊をそのまま形にした仏像というものはまだ存在していない。

また近年、南インドのサナティーからも華麗な装飾を有する欄楯をもつ大型のストゥーパが発見されており、これまでのインドにおける仏塔信仰の分布範囲説に新たな疑問を投げかけている。

アショーカ王の没後、マウルヤ朝は急速に衰え、ついでシュンガ朝が興ったが、最大勢力範囲はガンダーラから東マールワーに至る地域でしかなかった。前後してインド中西南部・いわゆるデカン高原の西南部にアーンドラ朝（サータヴァーハナ）が興り、三世紀にいたるまで南インドの文化の繁栄を築いた。

この南インド仏教の代表的なものがアジャンターの石窟寺院である（図23）。仏塔形式の信仰形態が中心であった北インドには、この種の石窟形態のもので見るべきものはなく、西北インドのアフガニスタンにいたって多数存在してくるという状況である。

チャイティヤ形式やビハーラ形式と呼ばれるもので（図4）、時代が下がると図5や図6のように仏像を有する中心仏塔もみられるようになる。またこのころより仏教壁画による表現が現れてくる（図7）と考えられている。

仏像の起源には諸説があり、マトゥーラあるいはガンダーラのどちらかが最初期の製作の地であると考えられており、仏像の造像は、一世紀ごろから始まり、クシャン朝時代（一～三世紀）に隆盛となり、五世紀ぐらいまで続いたものと考えられ、当時の東西文化の融合によるところが非常に大きいと考えられる。

シルクロードから日本へ

シルクロードは古くから通商路としてヘロドトス（前四八四～四二五年）の『歴史』やプトレマイオス＝クラウディオス（前二世紀）の『地理』などにみられ、ペルシャからタリム盆地に至るまでの交易路と中国を結ぶルートである。

白鳥庫吉博士は初期のシルクロードを毛皮街道といい、絹以外の毛皮や鉄などが西に輸出されていたようである。

シルクロードがその名の通り東西貿易路として確立されるのは、先述の西からアレキサンダー大王の東方遠征でギリシャとインドがつながり、東から漢の武帝による張騫の西域への派遣により東西が一つにつながったことによる。

武帝の張騫派遣は、通商目的のものではなく、匈奴を挟撃しようと大月氏と同盟を結ぼうとしたもので、張騫は建元二年（前一三九年）から一三年を費やして諸国を巡っている。

すでに張騫が大夏（バクトリア）を訪れたとき、大夏で四川の羌という国の竹の杖や蜀布が売られていたという。これらの物資は身毒（インド）からきたことを張騫は知り、四川からインド・中央アジア・西域にいたるルートがあることを武帝に進言すると、武帝は雲南の顛国に遠征し、雲南ルートを開拓しようとした程である。

また海のシルクロードが開かれたのもこのころであり、タイマイ（鼈甲）・真珠・象牙などの産物は海のシルクロードによるところが大きい。当時、ローマは中国との交易を熱望していたが、ローマと中国の間にはパルティヤ、ササーン朝などの強国が割拠しており、中国と貿易する際の中間貿易により莫大な利益を上げていた。そこでローマの商人たちはパルティヤなどからの中間搾取を免れるため、アラビア海をまわってインダス川の河口に上陸し、インダス川をさかのぼりガンダーラ・アフガニスタンから中央アジアのルートに入るという新ルートを開拓したのである。

このようにシルクロードは早くから通商ルートとして確立されており、このルート上には、玄奘の『大唐西域記』などに記されている多くの民族国家が存在し、独自の宗教や文化を有していた。仏教がこの通商路に沿ってこれらの民族国家の宗教観や文化、習俗と融合し、独特の仏教文化を築き上げていったことは、現在残されている石窟などの壁画や仏像をみれば一目瞭然である。

代表的なものを上げればアフガニスタンのバーミヤン石窟、クチャのギゼル石窟・クムトラ石窟、トルファンのベゼクリク石窟、敦煌、炳霊寺石窟、麦積山石窟など多数にのぼっている。

それらの石窟の壁画には、民族性や文化が色濃く反映されており、クムトラ石窟の新一・二窟の天井には、当時のクチャ人の様相をした菩薩が配され、その特徴をみることができる（図8、図9）。この菩薩図からはガンダーラ様式の菩薩形態に当時クチャにあった亀茲国の民族性の混在を読み取ることができる。また同じクチャのギゼル第三八窟では、上述のアジャンター石窟に見られるチャイティヤ様式から展開したと考えられる中心柱回廊方式の石窟があり（図12）、入り口上部には敦煌や中国の諸石窟にその影響が見られる交脚弥勒菩薩が描かれている（図10、図11）。また別の壁面には日本にも伝承した半迦思惟菩薩が描かれ（図14）、天井面は菱形文様の中に諸菩薩が配される構図（図13）や、ペルシャ様式などの影響を見ることができる。伝来した仏教とその形態に、土着の民族性や文化が融合していることがよくわかるものである。同じギゼルの音楽洞と呼ばれる石窟の壁画には日本の正倉院御物に納められている五弦紫檀琵琶と同型のものなどが描かれており、この地から仏教音楽や舞踊が伝来したことを容易にうかがい知ることもできる。

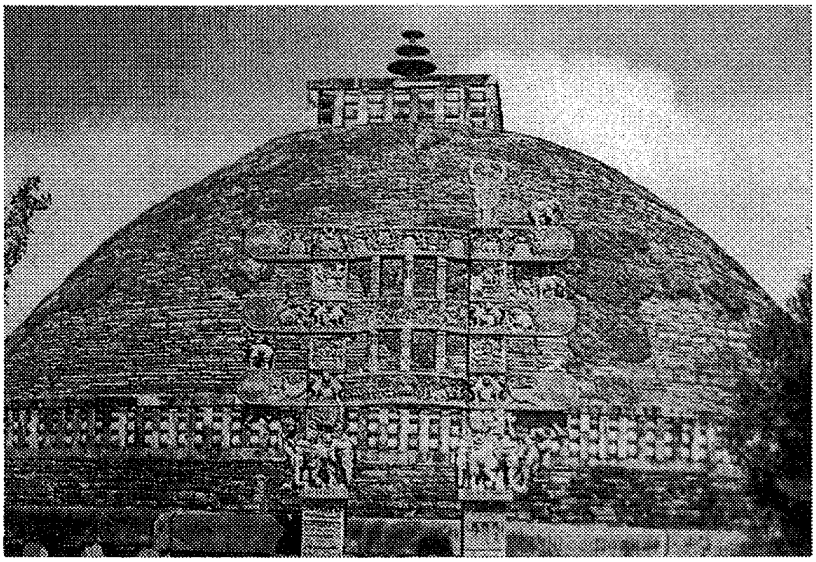
中国における仏教石窟は、このシルクロード各地域の影響を受けながら、中国独自の文化と融合しながら発展していった。初期の中国では北魏をはじめ五胡と呼ばれる辺境民族により多くの仏教石窟に仏像や仏画が描かれた。炳霊寺石窟では、北魏の時代から唐にいたるまでの仏像の変遷を容易に見ることができる。初期の仏像ではインド様式を模した形態で立像の薄衣の形態で造像されており（図16）、大仏（図15）もアジャンターなどに見られる初期形態によく類似している。唐代に入ってからの仏像は、やはり漢民族文化の影響を充分に受け、丸みのあるふくよかな姿態

で、衣紋も中国様式のものに変化している（図17）。第一三二窟には上述のギゼル三八窟に描かれている交脚菩薩が中国様式ではなく胡服を着た様式で造像されており、やはり民族による変遷の特徴を見ることができる（図18）。

麦積山石窟に至っては日本への文化移入の変遷を見ることができる。第一四七窟や第四四窟の座像の姿態、印相、特に衣紋をみるとき（図19、図20）、法隆寺釈迦三尊像の主尊の衣紋と類似していることが見て取れる（図22）。東大寺の盧遮大仏も、当初は唐の龍門大仏（図21）を模して造像されたといわれ、これらは中国様式に日本の独自性が混入しながら作成されたものと考えられる。仏像自体、異民族文化・技法の影響を受け合いながらも、それぞれの民族の中で独自に変化し流伝していったと見ることができよう。

おわりに

この様に、広範に伝播した仏教は、仏教内部での変化はもちろんのこと各地域の民族や習俗、宗教、文化と融合しながら、各地域独自の仏教文化を築き上げている。これは仏教の持つ寛容融和の性格により成されたものであり、諸民族の仏教受容が安穏とした人の生活と平和への願い・祈りとして結実し、それぞれ民族の特徴を吸収しながら発展したものである。仏教の持つ共生の論理により成し得たものといえ、釈尊が理想とした差別のない共生社会を作るという根本思想が他宗教との混淆や共存を寛容にし、その中で仏教文化も諸民族の中でともに融合、変遷をとげていったものと考えられるのである。



←図 1
サーンチー仏塔全景

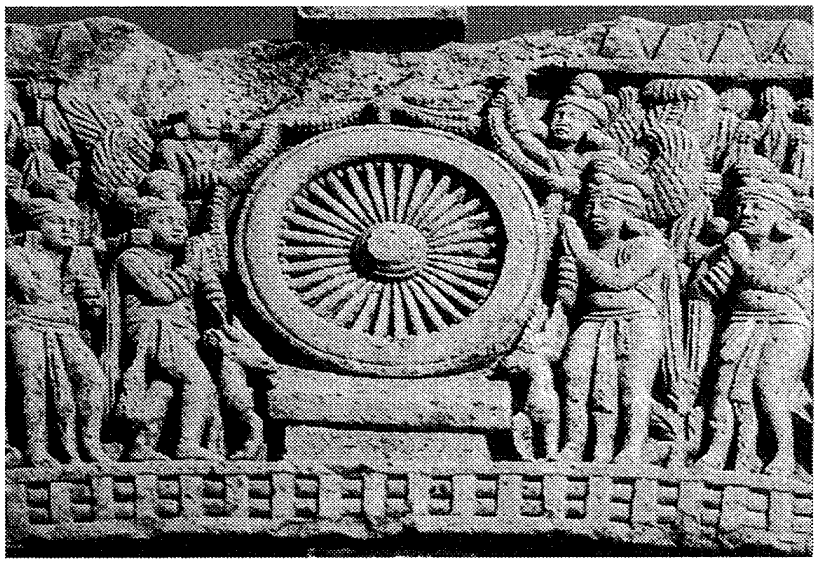
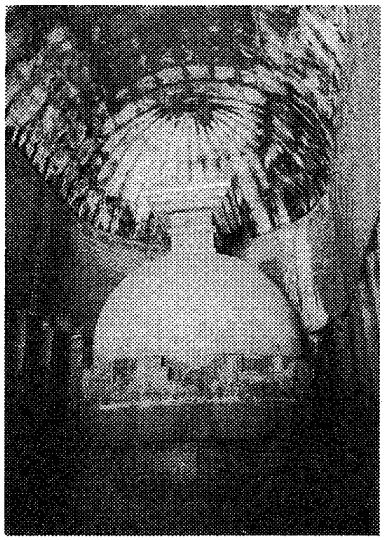
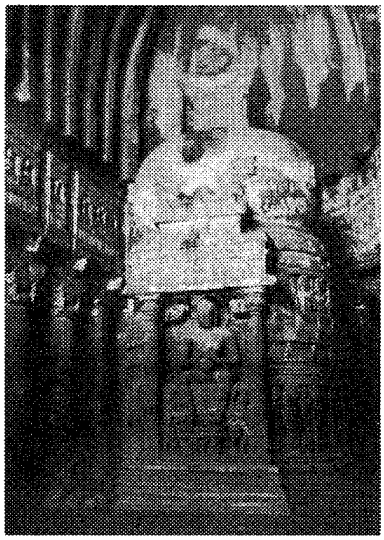


図 2 →
サーンチー仏塔欄楯

←図 3
マトゥーラ博物館蔵
欄楯



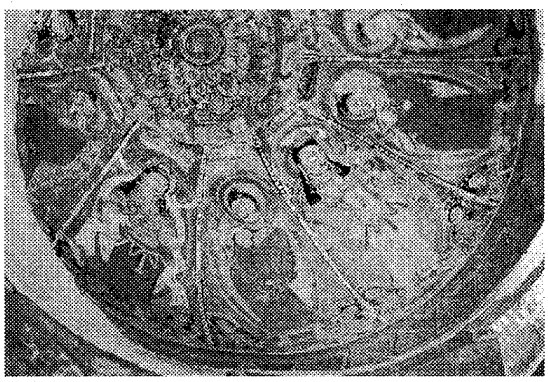
↑図4　アジャンター10・チャイティヤ



↑図5　アジャンター26・チャイティヤ

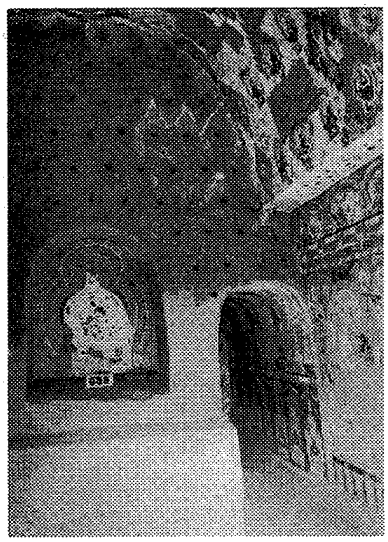
↑図6　アジャンター16・仏三尊像

←図7→
アジャンター菩薩像

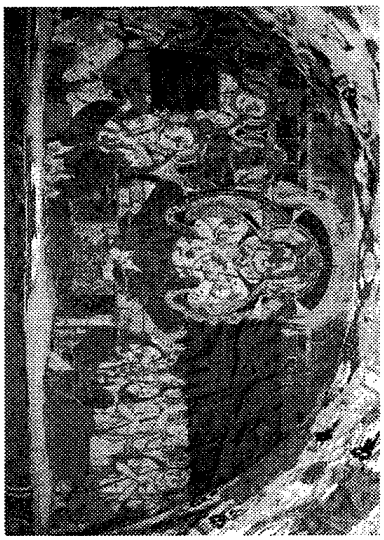


↑図8　クムトラ石窟・天井部

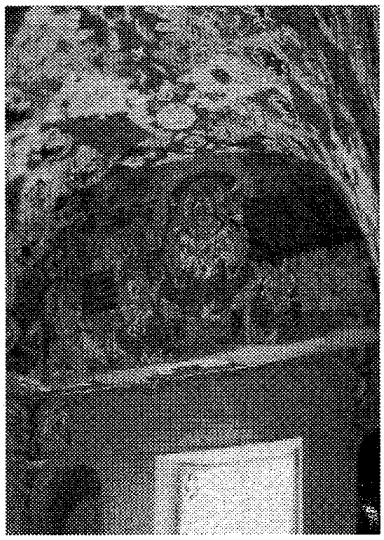
図9→
クムトラ石窟・天井図菩薩像



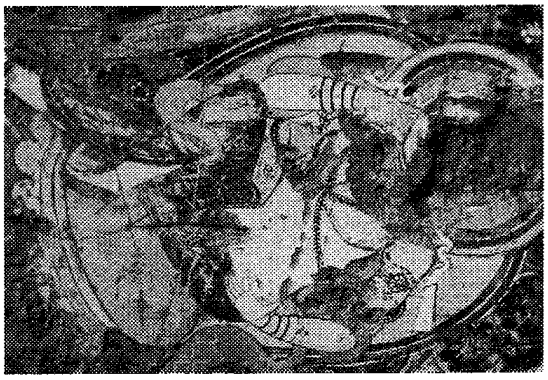
↑図12　ギジル38・内部



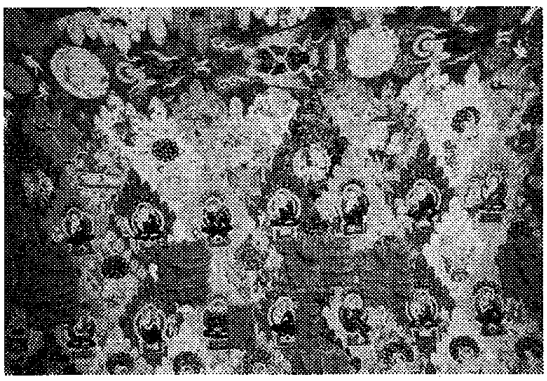
↑図11　ギジル38・
弥勒菩薩説法図



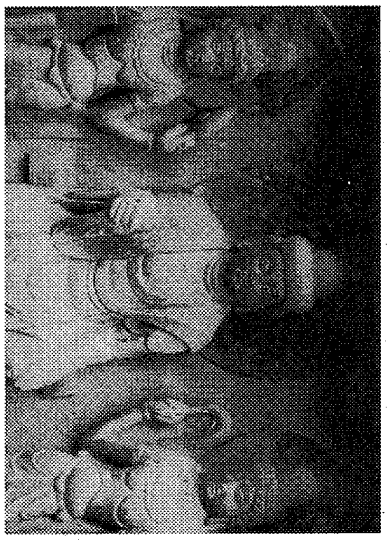
↑図10　ギジル38・
入り口上部



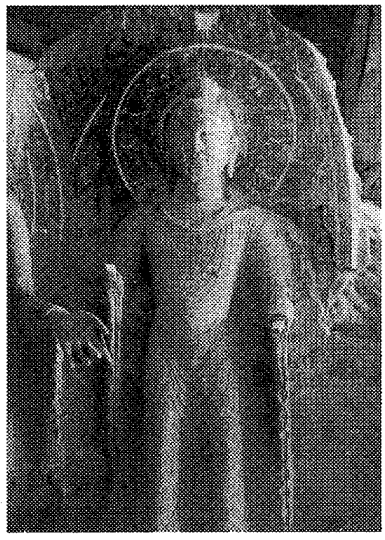
↑図14　ギジル38・半迦思惟菩薩



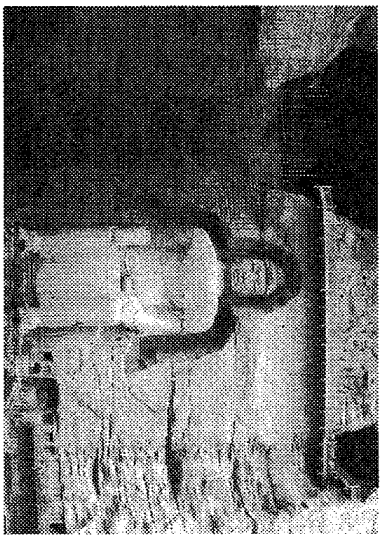
↑図13　ギジル38・天井部図



↑図17　柄霊寺34・
仏三尊像・唐



↑図16　柄霊寺169・
仏立像・北魏

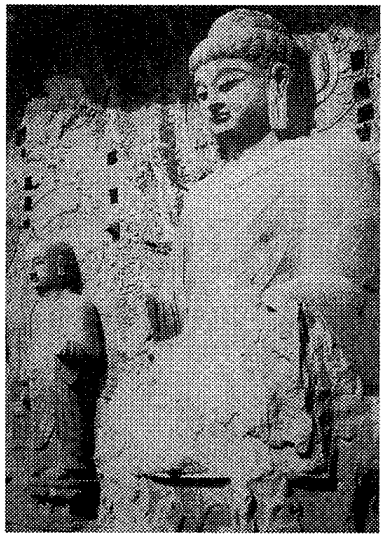


↑図15　柄霊寺石窟大仏

↑図20　麦積山44・
仏座像・北魏

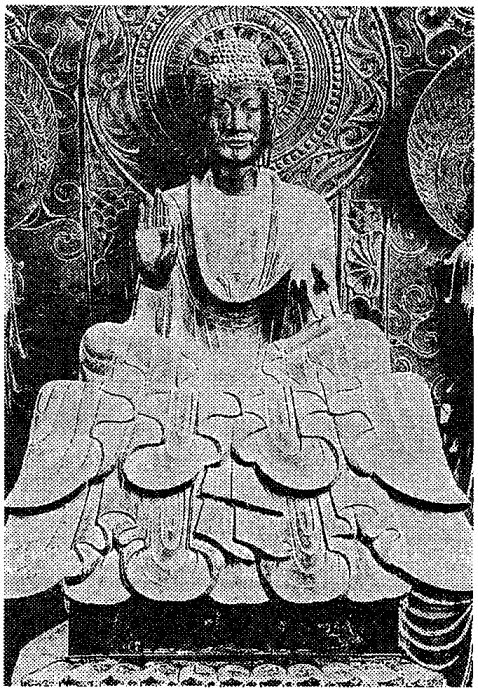
↑図19　麦積山147・
仏座像・北魏

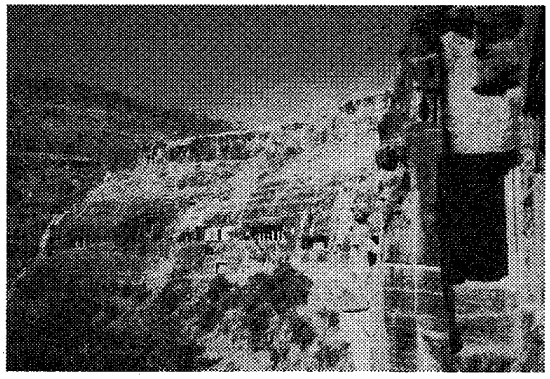
↑図18　柄霊寺132・
交脚菩薩・北魏



←図21
龍門・盧遮大仏

図22→
法隆寺
釈迦三尊像主尊





↑図23　アジャンター